

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2012年度研究成果報告書

| | | | | |
|------------|---|---------|--|----|
| 研究科名 | 立教大学大学院 文学研究科 | 研究科 | ドイツ文学 | 専攻 |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | | |
| | 文学研究科ドイツ文学専攻 博士課程後期課程2年 | 大島 直史 印 | | |
| 指導教員 | 所属・職名 | 氏名 | | |
| | 文学部・教授 | 前田 良三 印 | | |
| 自然・人文・社会の別 | 自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会 | 個人・共同の別 | <input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 | 名 |
| 研究課題名 | 1910年代～1930年代の「窓」(フレーミング)の知覚をめぐる表象・言説分析 | | | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏名 | | |
| | | | | |
| 研究期間 | 2012年度 | | | |
| 研究経費 | 193 千円 (実績額又は執行額) | | | |

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の主眼は「窓」の主題を基に現代の都市文化を象徴する平面的な知覚の問題を明らかにすることである。分析に用いた現代日本の写真集、中野正貴『東京窓景』と新津保建秀『\風景』において、東京は部屋の窓枠、PCモニターのスクリーンショットによって切り取られた矩形の平面として描かれている。この両者に共通する平面性とは現代の都市的な知覚の頭れとして読み解くことができる。そのためにはしかしフレームの個別的な集合を一つの形象として捉えることを可能にする新たな理論的枠組み、グリッドが不可欠である。本研究ではそこでメディアの同一性に基盤を置く従来のメディア・文化研究の超域性・複合性への方法論的更新もまた試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[窓・フレーム・グリッド] [平面論] [メディア都市知覚論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の主題である「窓」および「フレーム」は 2006 年以降、北米のメディア研究・ドイツ文化研究を中心に前景化してきたものである。主要な著作としては、Anne Friedberg の *The virtual window: from Arberti to Microsoft*(2006) や Lutz Koepnick の *Framing attention: windows on modern German culture*(2007)がある。この主題は日本のドイツ文学・ドイツ文化研究においていまだ未開拓の領域にとどまっている。上記の専門領域以外では、同主題に関連する書籍として、浜本隆志の『「窓」の思想史——日本とヨーロッパの建築表象論』(2011)がある。同書はしかし、建築の「窓」を切り口に日本と西洋の文化比較を行うものであり、そこで展開される日本＝「水平化」、西洋＝「垂直化」という文化主義的な図式化において、「窓」の経験に内在する平面的な知覚の問題が十全に明らかにされているとは言えない。ドイツ語圏においては、Rolf Selbmann の *Eine Kulturgeschichte des Fensters: Von Antike bis zur Moderne*(2010)が刊行されている。同書もまた、「窓」をメディア論、文化論の観点から考察するものではなく、主に西洋絵画史における象徴的なモチーフのひとつとして「窓」を位置づけるものであり、図像資料としてはたいへん有益であるものの、論述の射程は本研究の主眼とは異なる。メディアとしての「窓」、文化的象徴としての「窓」を主題とする先行研究のこのような不足のため、本研究ではまず「窓」および「フレーム」、さらにはフレームが複数あつまって構成する形象「グリッド」について直接的、間接的、場合によっては非明示的に論じられている研究文献を分野横断的に収集することを出発点とした。その研究成果は立教大学ドイツ文学専攻論集《WORT》第 34 号(2012)1-40 頁に掲載の拙論「フレーム／グリッド／マトリックス——中野正貴の東京写真を例にした『窓』のメディア文化試論」においてまとめられている。

同論における目的はまず北米のメディア研究、ドイツ文化研究における最新の研究動向である「窓」の主題を日本の同研究領域へと導入すること、そして「窓」の主題を現代の日本の事例、主に中野正貴の写真集『東京窓景』(2004)と『TOKYO FLOAT』(2008)を基に考察することで、現代のメディア文化を論じるためのその理論的な射程および限界を明らかにすることである。ここで試論的にあえて現代の日本の都市写真を分析の出発点とした理由は、第一に「窓」の主題をめぐる西洋中心的な視点を相対化するため、第二にこの「窓」の主題化とは学問の理論的、制度的な枠組みの内部における、メディアの固有性の観点を前提とした従来の研究方法への批判と共に、現在の具体的な日常生活における「窓」のユビキタス化(複合映画施設のスクリーン、薄型テレビや PC のモニター、スマートフォンやタブレット端末、ポータブルゲーム機の液晶画面など)を背景としているためである。中野のこのふたつの写真集を分析する上で明らかになったことは、「窓」の主題における抽象概念であるフレームは同じくグリッド(格子)と形象的な相関関係として捉える必要があるということである。中野の『東京窓景』において東京の風景は、一貫して部屋の内側から窓枠越しに撮影されることで矩形の「窓景」へと断片化、平面化されている。東京の風景をこうして「窓景」として描き出すことは中野にとって、東京に住む人々の日常的な都市経験における無意識的な知覚の枠組み、窓枠による風景の縁取りを可視化すること、そしてその様子を徹底的に静的な構図を用いて写し出すことで、窓枠によって意味化されない、窓枠の外のノイズの東京を逆説的に表出させることだった。東京を「窓景」へと断片化するこの窓枠(フレーム)とはまた、その構造化のレベルに注意を向けるならば、ひとつの「窓景」を図として浮かび上がらせる平面的な地としての複数の「窓景」、高層ビル群の窓格子(グリッド)と不可分な関係にある。フレームと相関するこのグリッドの形象を拙論ではさらにミース・ファン・デル・ローエの建築空間における「冗長性」と杉本博司のシリーズ写真『劇場』における「空虚さ」へと補助線を引いた。こうした作品外在的な解釈の操作を通して明らかになったことは、『東京窓景』とは、東京の風景を「窓景」(フレーム)として感性的に受容する断片的な知覚の顕れであると同時に、東京を断片的な「窓景」の反復(グリッド)として構造化する、全体的集合空間を喪失した平面的な都市の知覚の顕れとして読み解くことができるということである。この平面的な都市の知覚の問題は中野

研究成果の概要 つづき

の写真集『TOKYO FLOAT』においては、様々な記号的な差異，地上／水面，物質／非物質，現実／仮想を無効化するノイズの平面一元性としてさらに全面化している。

中野のふたつの写真集の分析を通して明らかになったフレーム／グリッドの形象的相関性，都市の知覚の平面性を基に，本研究ではさらに新津保建秀の写真集『\風景』（2012）を分析した。この研究の暫定的な成果は，日本ヘルダー学会 2012 年度秋季研究発表会報告「非都市としての都市，あるいは『メッセージのないコード』としての写真？——新津保建秀『\風景』のメディア美学的分析を中心に」でまとめられている。同研究発表における主眼は，「窓」の主題と都市の知覚の平面化をめぐる現在の帰結として，新津保の写真集における「風景の無効化」を問題化することである。先行する中野の写真集において都市の知覚は，窓越しに見える都市の風景，水面に映る都市の風景として，傾向的な平面化の中にも，風景の存立基盤となる空間的外在性を保持している。それに対し，新津保において風景は空間的に内在化した PC モニターのスクリーンショット写真として描き出されており，その基盤を完全に喪失している。この風景の存立基盤の喪失はさらに PC のプロセッサの情報処理が引き起こす破損した画像データのスクリーンショット写真においても確認することができる。PC 上でハードディスク内の画像データを一挙に大量に開くと，画面上には各ファイルが機械的に微妙なズレを孕んであらわれる。そして，開くファイルの絶対数をさらに上げていき，PC のプロセッサが画像の処理限界に達すると，画像ファイルは壊れ，最終的に画面上にはグレーの非表示領域が表示される。写真集内に意図的に挿入されたこの破損した画像データ上のノイズは新津保のスクリーンショット写真における非インデックス的な原理を明らかにしている。写真の記号は，多くの写真理論においてこれまで，アメリカの数学者・論理学者チャールズ・サンダース・パースの提唱したインデックス記号，つまり記号とその指示対象とが物理的な接触関係をもつものとして位置づけられてきた。しかし新津保のスクリーンショット写真において写真記号のインデックス性は，被写体との直接的な指示関係をもたない，個人のハードディスク内に保存された画像データの複製的な二次性によって無効化されている。そのためスクリーンショット写真上に開かれた大量の画像データもまたいわゆる写真のコラージュの手法とは異なる。写真のコラージュにおいて作者の意図といった人為性が不可避的に入り込んでしまうのに対し，新津保のスクリーンショット写真においてそれは PC のプロセッサの自動的な情報処理が行う確率論的な結果に過ぎないからだ。新津保の写真集『\風景』とは，表題で風景の前に置かれたプログラミング記号「\」が既存の意味の無効化を意味しているように，写真における風景の存立基盤であるインデックス性がもはや解消されていること，そこでの風景とはもはや「マシン」の自動処理に基づくフレームとグリッドの自己産出運動であることを表している。新津保の写真集におけるこの風景の解体から中野のふたつの写真集へと事後的に時代を遡るならば，そこには現代の都市写真における空間的外在性のクロノジカルな解体の過程を図式的に表すことができる。中野の『東京窓景』における「窓景」の平面性は，『TOKYO FLOAT』における水面の風景の流動性を經由し，最終的に新津保の『\風景』におけるスクリーンショットの非インデックス性へと至る。

本研究ではさらに上記の研究成果をもとに，建築的な窓を持たない，仮想の「窓」のメディアであるパノラマの海外現地調査を 2013 年 2 月 7 日～2 月 19 日の約 2 週間にかけて行った。ベルリンのフンボルト大学，州立図書館での関連文献収集の後，19 世紀から現存するパノラマの内でも時代的に古い三つのパノラマ，ヴォッヒャー（トゥーン），ブルバキ（ルツェルン），メスダハ（アムステルダム）を訪問した。パノラマの知覚の追体験等を通して明らかになったことは，写真史における従来のリアリズム，インデックス性の系譜とは異なる，魔術的リアリズム，都市性の系譜の存在である。近代の都市写真史における都市の形姿を現実の「都市の夢」として捉えることを主眼とするこの研究成果は，現在執筆中の『ヘルダー研究』第 18 号 2012 年寄稿論文「写真都市の夢——新津保建秀『\風景』の都市写真分析を中心に」でまとめている。

※この（様式 2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は，その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

1. フレーム／グリッド／マトリックス
——中野正貴の東京写真を例にした『窓』のメディア文化試論
〔立教大学ドイツ文学専攻論集《WORT》第34号2012, 1-40頁〕

2. 非都市としての都市,あるいは『メッセージのないコード』としての写真?
——新津保建秀『\風景』のメディア美学的分析を中心に
〔日本ヘルダー学会2012年度秋季研究発表会
(2012年12月16日梅田ちゃやまちアプローズタワー)〕

3. 写真都市の夢——新津保建秀『\風景』の都市写真分析を中心に
〔『ヘルダー研究』第18号2012〕(執筆中)